

精神疾患診断の“バイブル” DSM-Vに向ける火の一矢

(書評者) 松沢病院・精神科医
今村弥生

『正常を救え—— 精神医学を混乱させるDSM-5への警告』

アラン・フランセス＝著
大野裕＝監修 青木創＝訳

2013年発行
定価2160円(本体2000円+税8%)
講談社

笑いと同時に心に刺さる糾弾の連続

2013年に改訂されたアメリカ精神医学会のDSM。精神疾患の分類と診断のマニュアルとして広く流布し、日本でも診断の“バイブル”の如く扱われている。

本書はその矛盾や問題点、不適切な診断に基づく薬物療法と、製薬会社のマーケティングの非倫理性を批判しているのだが、著者のアラン・フランセス氏の前版DSM-4の作成委員長という経歴に、まず驚かされる。

“バイブル”への反論はさぞ重みがあるはず、と思いきや、「診断のインフレ」の項のエピグラフで、「不思議の国のアリス」からの次のような引用に、私は思わず吹き出してしまった。

アリス 「でも、頭のおかしな人のとこなんか、



2013年、診断マニュアルDSMが大改訂!
このままでは健康な患者も薬漬けになる。

精神医学の世界的権威から

緊急提言!

講談社

いきたくないわ」

チェシャ猫 「しょうがないさ、ここの連中は、
みな頭がおかしいんだから」

これは、病名が必要ない人にまで与えられ、乱発される現状への風刺である。サブタイトルに「精神医学を混乱させるDSM-5への警告」とあるが、“告発”“糾弾”と言ったほうがふさわしい論調でDSM-5を徹底してこき下ろしているのも、このサブタイトルが大変控えめな表現であることがわかる。

批判は痛烈だが、表現は医療者ではなくても理解できるほどわかりやすく、ユーモアがあり、感情に走っていない。そのためによりいっそう胸に突き刺さる。本書を読んで気分を害する関係者もいると思われる。私自身にもここに痛い箇所はあったが、なぜか本書を読み進めるのをやめるこ

とはできず、それは痛快な小説を読むようでもあった。

人の歴史は「診断のインフレ」の連続だった

私は本書に、国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター所長の犬野裕先生の推薦で出会うことになった。犬野先生はこの本の監修者である。

手に取るとなかなか厚みのあるこの本の、多くのページが精神医学の歴史に割かれていたのは意外だった。しかもその歴史は、紀元前の狩猟部族のなかのシャーマンの治療行為にまでさかのぼり、ヒポクラテスや中世ヨーロッパの神官のカウンセリングなども登場する。これはDSM-5について書いてあるはずではなかったのか？と一瞬迷いを覚えるが、読み進めていくと、「中世の魔女狩り」と、現在の診断名の乱発によって起こった「ADHD児の大量発生」や「中枢神経刺激薬の大量処方」に類似性がある、という考えもしなかった事実突き当たる。

この本を手にとった私もまた、昨今の操作的診断基準がスタンダード化される傾向に違和感があった。そして人の歴史とは切っても切れないメンタルヘルスの歴史のなかで、似たようなことが繰り返されていることも納得できた。

さらに読み進めると、唐突に「あなた」と二人称で語りかける口調に変わる。「あなた」とは、精神障害を持つ当事者のことである。彼らに向けて、医療機関にかかる上での心得を論じているのだ。本書が専門家だけでなく、医療にかかわるすべての人を対象にしていることがわかる。

「操作」される精神科医から脱して

ところで、表紙にあるグレイの波打つような模様は何か？よく見ると、錠剤の空ヒートが山と積まれ、折り重なった層であった。

歴史的には多くの妥協を伴う過程のもと、未完の提案として発せられたDSMが、今は“バイブル”の如く、精神科医の診断思考に操作性を発揮してしまった。それにより、何百万人の人が実際には患っていない病気と診断され、結果、内服してしまった必要のない薬が層を為している。それを表していると思われた。

本書からは、患者を鎖から解放したフィリップ・ピネルへの敬意が伺える。現代は精神疾患について多くの研究が進んだが、果たして患者たちは、薬物療法の「見えない鎖」に再びつなげようとしているのではないだろうか。

世の人に向けて大量発行され、安易に貼られた精神疾患のレッテルをはがすこと。古代の医師／治療者の崇高な実践から遠くかけ離れて、機械的な診断と思考なき投薬のみを行う精神科医へ、再び「医師」へと回帰すべしと、本書は訴えている。

だが、著者は我々に投げかけている。「われわれはできる。だが実行に移すだろうか？」と。

「診断に関する問題は、医師やAPAや消費者保護団体にとってではなく、患者にとって何が最善かによって決定されるべき」と本書が述べる通り、知識を持ちつつ、私たち医師は「人としての」患者のもとへ戻り、もう一度考えるべき時期なのだ。操作的診断基準に「操作」される精神科医ではなく、人が生きていく苦しみに沿い、本当の回復を考えられる医師が求められる世の中なのだと感じられた。

精